

[041\_2000]第四十一回中央図書館貴重文物展観目録  
： 平安朝文学入門 ： 竹取・伊勢・源氏の世界

九州大学附属図書館中央図書館

今西，裕一郎  
九州大学大学院人文科学研究院：教授

<https://doi.org/10.15017/1485028>

---

出版情報：九大広報，pp.1-11，2000-05-08. The Committee of Public Relations Kyushu University  
バージョン：  
権利関係：

平成12年度 開学記念貴重文物展観

# 平安朝文学入門

—竹取・伊勢・源氏の世界—

日時：平成12年 5月 8日（月）～14日（日） 10：00～16：00

場所：九州大学中央図書館 2階自由閲覧室

展観資料の選定、解説、配列につきましては、大学院人文科学研究院 今西祐一郎教授に全面的なご尽力をいただきました。



## はじめに

九州大学は約340万冊の蔵書を有し、その内、明治以前の日本古典籍は約6万6千冊を数えます。日本古典籍の多くは附属図書館の細川文庫、音無文庫、萩野文庫、支子文庫<sup>くちなし</sup>等の特殊文庫、および文学部の蔵書から成っていますが、中でも細川文庫は、熊本細川藩の支藩、宇土細川家の旧蔵書で、歴代藩主の好学を反映して、中古、中世、近世の和歌、和文の典籍に富む貴重なコレクションとして有名です。

九州大学附属図書館では、これまでの貴重文物展観においても、これら日本古典籍の展観を以下のようなテーマで行ってきました。

「細川文庫の勅撰和歌集」	第29回	昭和61年
「源氏物語の本」	第35回	平成6年
「奈良絵本－室町末期から江戸中期にいたる絵本・絵巻－」	第36回	平成7年
「伊勢物語の本－写本から版本へ－」	第37回	平成8年

「平安朝文学入門」と題する今回の展示においては、それらの蔵書の中から平安時代の物語、おなじみの『竹取物語』、『伊勢物語』、『源氏物語』を中心に、併せてそれに関連する書物を選び、展観します。

就中、細川文庫本を核とする『伊勢物語』およびその関連の注釈書は多数にのぼり、質としても優れたものが多くあります。

『源氏物語』の注釈書にも『万水一露抄』、『覚性院抄』など優れたものが見られますが、残念なことに『源氏物語』そのものの蔵書は文学部蔵『古活字版』を筆頭に2、3を数えるのみです。しかし近世初期に出版された『古活字版源氏物語』は、他に類の乏しい稀観本です。

図書館の電子化を目ざして平成8年に発足した附属図書館研究開発室では、平成11年度に、その『古活字版源氏』のカラー画像データベースを製作し、四月よりインターネット上で全世界に向けて発信しています。関心のある方は九州大学附属図書館のホームページ (<http://www.lib.kyushu-u.ac.jp/index-j.html>) から御覧下さい。なお、本展観の期間中、展観会場ロビーでも、そのデータベースの実演を行っていますので、大方の御参加をお待ちしています。

付記・この解説は、以前に行った貴重文物展の解説をもとに作製した。

- ・展観には、参考として、『源氏物語絵巻』等、著名作品の複製本をも陳列した。ただし、本冊子ではそれらについての解説は省略した。

## ——展 観 資 料 の 解 説——

### 1. 竹とり物語 (近世中期写) 上下2巻2冊

支子文庫本。大本綴帖。花鳥文様の金欄緞子藍地表紙左肩に下巻のみ「竹とり物語下」(題簽)と外題を記す。本文と同筆の原題簽。上巻は剝落した跡がある。内題「たけとり物語上(下)」。見返しは金泥布目文様。紙数は順に30丁・26丁で、内墨付28丁・24丁。共に巻末のみ遊紙2丁あり。本文料紙鳥の子。1面10行。

本文は流布本の正保版本系。挿絵は上巻に7面、下巻に6面存し、巻末の余白は本文を散らし書きにする工夫が見られる。奈良絵本の体裁は一般に、横本仕立てのものと、本書のような縦本の大本型があるが、後者の方が比較的古い形である。本書の挿絵の、金銀の箔や砂子をふんだんに用いた豪華さ、襖絵や衣服の文様・顔の表情など細部まで描く巧みさ、鮮やかな色彩は、本書を奈良絵本として優れたものに行っている。

### 2. 竹とり物語 (近世中期写) 3巻

文学部蔵。卷子本。表紙は華龍文繋ぎの緞子、紐は萌黄色の平織。左上部原装絹題簽に「竹とり物語上(下)」「竹とりもの語 中」と墨書。見返しは金布目、本文料紙は鳥の子、裏は銀切箔散らし、軸は木製、軸頭は象牙。木箱中央に打付書で「第貳拾五号、竹取物語、三巻」と墨書、近世中末期の筆か。

詞書は通行本。細みの流麗な書本。極彩色の絵は上中下巻各2面づつ、計6面存する。『竹取物語』の絵巻は十数点知られているが、本絵巻は絵の少なさで異色である。又、画面を際立たせるためか、上下の雲型が濃く大きく描かれている。

### 3. 竹取翁物語 (斎藤彦麿自筆本) 1冊

音無文庫本。斎藤彦麿は、国学者。賀茂季鷹、伊勢貞丈に師事して、国学、故実関係の膨大な著作を残した。明和5年(1768)生まれ、嘉永7年(1854)没。本書は彦麿が友人の国学者で『落窪物語』や『蜻蛉日記』の注釈も残した田中大秀の『竹取翁物語解』の注の要点を朱筆で書き入れた本。

巻末に「此物語の注くさ／＼あれど、我友飛驒国人田中大秀が解、いとよろしければそれによれり 洛陽花翁」の識語と、「蘆之仮庵」、「彦麿」の方印を捺す。

### 4. うつほ物語 俊蔭巻 (寛文頃写) 5巻

細川文庫本。卷子本。表紙は改装、金欄に草花櫛文様。左肩原題簽に「うつほ物語一(～五)」と墨書。料紙鳥の子。内容は俊蔭巻全巻。極彩色の絵(32.4×48.8)が巻一から順に3・3・5・3・5図の計19図ある。巻序が内容と矛盾しており、正しくは巻3・2・5・4・1の順。題簽の誤貼によるものか。奥書の類はない。

本絵巻は、天人の琴を伝える清原俊蔭、俊蔭女、藤原仲忠、犬宮の四代にわたる音楽の家の物語にあて宮求婚譚、立太子譚がからむ、現存最古の長編小説『宇津保物語』の冒頭巻俊蔭を絵巻化したもの。『宇津保物語』の絵巻としては、他にほぼ同時代の作と思われるものに天理図書館本がある。本絵巻はそれと共に双璧と言われている。

#### 5. うつほ物語 (細井貞雄書き入れ本) 20巻30冊

音無文庫本。『宇津保物語玉琴』、『宇津保物語玉松』、『宇津保物語二阿抄』等の著作で、『うつほ物語』研究の基礎を築いた国学者細井貞雄の書き入れ本。書き入れは、文化3年補刻版本に文化5年(1808)正月から6月にかけて某人蔵の「古写旧校訂本」によって施された。

その「古写旧校訂本」による書き入れについては、それを善本の面影を伝える貴重な本文と評価する河野多麻氏説と、そうではなく細井貞雄による恣意的な改訂本文であるという説とに評価が分かれる。河野説については同氏著『うつほ物語伝本の研究』(岩波書店、昭和48年)に詳述されている。

細井貞雄は安永元年(1772)生まれ、本居宣長の門人となる。文政6年(1823)没。各冊に貞雄の蔵書を示す「詞華堂」の方印、および「新宮城書蔵」(双郭)の長方印を捺す。後者は『丹鶴叢書』を編んだことで名高い好学の紀伊新宮城主水野忠央ただなか(文化11年(1814)～元治2年(1865))の蔵書印である。

#### 6. 伊勢物語 (烏丸光広筆 近世初期写) 1冊

大本列帖装。緞子表紙。左肩の題籤は、金箔散らしに「伊勢物語」と墨書。右肩に「蜷川新右衛門尉 哥 烏丸光広卿伊勢物語」の紙片を貼る。見返しは金箔散らし。「烏丸光広卿 伊勢物語一冊 むかし男」と古筆極めを貼付。料紙は鳥の子。墨付46丁、一面16行書、一行20字前後。巻末に、流布本系統の奥書を付す。

#### 7. 伊勢物語 (近世初期写) 1冊

支子文庫。枳型本。墨付62丁。本文は、いわゆる定家本系統であるが、その内の天福本系、武田本系、流布本系、いずれとも決し難い。第六十五段の途中に、歌一首(さりとともと思ふらむこそ悲しけれあるにもあらぬ身を知らずして)を含めた四、五行ほどの脱落がある。

奥書はなく、書写者や書写の経緯などの詳細は不明であるが、緞子張の表紙に、「山本殿勝忠卿」という古筆極め札を貼付。山本(藤原)勝忠は、慶長13(1608)年生、承応3(1654)年没、参議正三位。

#### 8 伊勢物語 (中院通純筆 近世初期写) 1冊

細川文庫。大本列帖装。表紙は唐草模様に陶器模様が混じる。朱色の題籤を中央に付し、「伊勢物語」と墨書。料紙は鳥の子。墨付69丁、一面9行、一行20字前後。朱で三ヶ所書き入れがある。もともとその本が入っていたと思われる箱はなくなっているが、その蓋が残されており、裏には

~~~~~

古筆了意の極書と花押があり、表に「伊勢物語中院書写」の文字がある。

本文は天福本とほとんど変わらない。

中院通純（慶長16<1612>～承応2<1653>）は公家、権大納言。内大臣正二位通村の男。

#### 9. 伊勢物語（藤原経孝筆 寛文元年写）1冊

枳型本列帖装。表紙は萌木色、唐草文様。左肩に題籤、「伊勢物語」と墨書。料紙は鳥の子。墨付82丁、一面10行、一行17字前後。

本文は天福本系統であるが、武田本、流布本系統のものと校合、異本表記を傍記。その他、朱点、人物表記が付されている。

奥書に「右一冊者隔海数千里遠邦人強依有所望終不得遁写秘伝本以染翰尤憚他見者也 寛文元年 神無月廿八日 大炊御門前内大臣 正二位 藤原経孝」とある。

藤原経孝（慶長16<1612>～元和2<1682>）は公家、寛文十年従一位左大臣。頼国男。

#### 10. 伊勢物語（四辻公韶筆 近世初期写）1冊

細川文庫。大本袋綴。墨付71丁、一面10行。

包紙に「四辻正三位公韶卿正筆 伊勢物語 一冊」と墨書。さらに「此上包紙書付古筆了音書則是極礼に相成間冊かへ間輔候」の極礼を貼る。

本文は天福本系統。歌に集付を付す。本文の後に業平・行平・紀有常・二條后・河原左大臣融の略歴を示す天福本系統の勘物と、「なぞへなく」「みやび」などの釈義、これについて天福本、武田本、流布本の奥書が続く。最後の丁には「墨付七十一枚 石井滋久入道了派に相極る」極礼を添付。

四辻公韶は参議正三位。寛文10（1670）年8月4日生、元禄13（1700）年7月3日没、享年31歳。

#### 11. 伊勢物語（今城定経筆 元禄11年写）1冊

細川文庫。大本列帖装。表紙は布製薄茶浅葱地に。金欄緞子（文様は不詳）。見返しは金箔雲霞模様。題籤は中央に「伊勢物語」と墨書。金箔雲霞模様。内題なし。本文料紙は鳥の子。墨付63丁、白紙3丁。一面10行、一行25字前後。和歌3字下げ。本文は定家本系統であるが、天福本及び武田本とも小異があり、流布本に含まれるか。書写態度はかなり精確で誤脱は少ない。奥書に「此物語令書写訖 元禄十一年二月上旬権中納言（花押）」とあり、付属する極め書に「伊勢物語筆者 今城中納言定経卿 外題 有栖川幸仁親王」（包み紙に「伊勢物語筆者」）とある。書写者の今城中納言定経は藤原氏、花山院家中山支流の第4代。明暦2（1656）年6月24日生、元禄15（1702）年2月26日没、権中納言正三位享年47歳。

#### 12. 伊勢物語（近世中期写）1冊

文学部蔵。大本列帖装。表紙は縹色切箔地に金泥で草花文様。金泥模様の遊紙首2丁、尾3丁。

題簽なし。料紙は金泥模様、鳥の子。墨付58丁。一面10行書。本文は流布本系か。集付を付す。卷末に業平の略伝、天福本・武田本・流布本奥書を挙げ、ついで「依紹巴法師所望凌老眼染筆者也／天文廿四孟秋上幹 稱名野釋判」「此伊勢物語者為消永日染悪筆者也／天正十年季春上幹 紹巴判」「頻依所望不順後覽嘲哂 横染之／元和龍軒四曆午仲秋望後／貞興 判有」「吾各々の本依御所望慥写け 候 努々他見有ま敷者也」の奥書を列記。

### 13. 伊勢物語（藤原喬任筆 近世中期写）1冊

支子文庫本。枡型本列帖装。表紙は布製浅葱色地に金欄緞子菊花唐草文様。見返し金箔。題簽なし。1丁裏右上角に「矢野蔵書」の印。本文料紙は鳥の子、墨付69丁。一面10行、一行15字前後。和歌2字下げ。本文は流布本系統化と思われるが、書写態度は初段第一首目の和歌を「春日の、若紫のすり衣忍ふの乱そめにし我ならなくに」と写すごとく、全体的に精確さを欠く。奥書に「依或人所望渡筆記 藤原喬任」とあり、外箱上蓋右角に「廣橋殿 伊勢物語」と墨書。書写者藤原喬任については未詳、外箱の広橋氏は藤原氏日野家日野支流。

### 14. 伊勢物語（源重孝筆 宝永頃写）1冊

細川文庫。大本袋綴。表紙は布製薄茶色堅菱渦巻紋に金欄唐草文様。題簽は表紙中央に「伊勢物語 全部」と墨書。内題なし。1丁表右下角に「親冬」の印。本文料紙楮紙。墨付50丁、白紙2丁。一面12行、一行25字前後。和歌4字下げ。本文は定家本系統で天福本及び武田本とも小異があり、流布本に含まれるか。書写態度は単純な誤脱がやや目立つ。奥書に「右或依所望令書写卒 侍従源重孝」とある。源重孝は庭田氏、宇多源氏。代々神楽を以て朝廷に仕えた。権大納言重條男。元禄5（1692）年10月25日生、延享2（1745）年12月19日没、権大納言正二位享年54歳。重孝は宝永3（1706）年、15歳で侍従五位上、同6年18歳で右少将となっているから、この頃の書写か。

### 15. 伊勢物語闕疑抄 2冊

細川文庫。写本。大本袋綴。柿渋表紙。上巻89丁、付箋16箇所。下巻94丁、付箋12箇所。朱で、天福本本文の校合、その他の書き入れがある。

本書は、三光院三条西実枝の講釈の聞書をもとに、愚見抄、肖聞抄など、当時までの代表的な『伊勢物語』の諸抄を集大成したもの。卷末に天福本・流布本、武田本の奥書・勸物・系図等を添える。文禄五（1596）年成。江戸初期における伊勢物語の享受、研究に多大な影響を与えたことは、伝存する写本、版本の数の多さから窺える。本書は、その中でも善本として片桐洋一氏によって紹介された京都府総合資料館蔵本（中院通勝奥書、法眼祐孝書写）と同じく、刊本になる以前の、原初形態に近い闕疑抄の本文の面影をとどめる。

### 16. 伊勢物語秘訣抄（延宝7年刊）12冊

音無文庫。大本袋綴。表紙は藍色無地。左肩の単辺の刷題簽には「伊勢物語秘訣抄 一（～十

二)」とある。右肩には、明治三十七年記の石河光治の「蔵書之記」を貼付。本文料紙は楮紙。墨付、各巻平均25丁。本文一面12～17行。十二巻末に「延寶七年巳未九月二十一日 中野太郎左衛門板行」の刊記。

本書は、序によれば、伊勢物語を学ぶ「あるやんごとなき息女」の所望に応じて、「諸抄を講釈のごとくに」平易に書き記して、読みくせや口伝を残らず書き添えたものである。また、序の記述から、婦女童蒙向けの著述を意識したと指摘されている（田中宗作『伊勢物語研究史の研究』）。

ところで本書は、先行する『伊勢物語器水抄』『伊勢物語集註』と記述の重なる部分が多く、これらの注釈書を継承したものとする見方があった。しかし、本書における『器水抄』『集註』の中の前除・改変・批判などに見出される傾向から、道徳的な教戒色を避けようとする特徴、また、従来の道徳的な文学観に対して自由な態度を有する特徴をもつことが明らかになった（田中葉子『『伊勢物語秘訣抄』について』『語文研究』68号）

#### 17. 闕疑抄初冠（万治3年刊）5冊

音無文庫。大本袋綴。加藤磐斎著。萬治三（1660）年刊。細川幽齋『伊勢物語闕疑抄』に頭注を付したものの。

頭注には、愚見抄、惟清抄、肖聞抄、真名本、「闕疑抄の頭書」などの先行注釈書をはじめ、和漢の典籍を引用する。特に、「頭書」「首書」の形で用いる「幽齋闕疑抄のかしら書」（巻二・2・オモテ）に依るところが大きい。また、「裏の説」や「七ヶ大事」に言及するが、その内容には触れず、条目を掲げるにとどまる。うち、「七ヶ大事」は、別掲『伊勢物語口伝』の「七ヶ大事口伝」にあげる条目と一致。なお、この「七ヶ大事」は後に磐斎が著した寛文八年（1668）刊『伊勢物語新抄』にも同じ指摘が見える。

#### 18. 伊勢物語しのぶ摺抄 2冊

文学部蔵。大本、袋綴。全92丁。外題は、表紙に打ち付け書き。「伊勢物語しのぶすり抄上下 一条禅閣御説紹巴聞書」という内題を付す。奥書には、「慶長九曆申辰仲秋日」とある。

序文には堯孝の名が見い出されることから、二条流の注釈であろう。著者は未詳。但し、この序文が、元来、原「しのぶ摺抄」とも言うべき、本書とは別種の本に付されていた可能性も高いという。また、奥書には、内題の示す通り、一条禅閣（兼良）の説と紹巴の聞書を以て書写した旨が記される一方、注釈内容は、『伊勢物語宗長聞書』や『肖聞抄』と同文を多く含む（鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊題3巻「伊勢物語忍摺抄」解説）。堯孝は、頓阿曾孫。室町時代、二条派の中心歌人として活躍した。東常縁は、その門下。『慕風愚吟集』の他、『堯孝法印日記』『桂明抄』などの著作がある。

#### 19. 伊勢物語 零本（1冊）

支子文庫。書写者未詳。柀型本列帖装、写本。外題内題ともになし。料紙は鳥の子。墨付80丁。



さらに巻末3丁文に、他阿上人、作者未詳、木下長嘯子、人丸、春道列樹の和歌を記すが、後世の書き込みの可能性がある。

本来は二冊本だったと推定されるが、現在では下巻を欠き、総論と『伊勢物語』初段から第63段までの注釈のみを伝える。各章段の登場人物に具体的な人名を指摘するという、いわゆる古注の方法をとるが、一方で、「古注」を批判し「當流」の説を展開するという二条家流の特徴も確認できる。大津有一『増訂版 伊勢物語古注釈の研究』に田村専一郎氏所蔵として紹介、「二条流の注釈書か」とされる。

## 20. 伊勢物語図絵（文政8年刊）3冊

支子文庫。大本、袋綴。表紙左肩の題箋に「校訂伊勢物語圖繪 中（下）」（上巻題箋は剝落）。内題なし。料紙は楮紙。墨付上巻（49段まで）69丁（うち挿絵41丁）、中巻（78段まで）45丁（うち挿絵31丁）、下巻64丁（うち挿絵43丁半）。一面10行書。上巻巻頭に市岡猛彦による「伊勢物語序」、下巻巻末に「文政八年乙酉秋」の刊記。

市岡猛彦の序文によれば、本書は「或人」が「あらため訂（タゞ）し」た本文に、猛彦が真名本による校合を付記したもの。挿絵は嵯峨本と場面・構図ともに異なるものを多く含む。

市岡猛彦は、尾張藩士で本居宣長・春庭の高弟。天明元（1781）～文政10（1828）。47歳。

また挿絵画家として序文に名の挙がる「難波人法橋玉山」は、岡田玉山。大阪の人。月岡雪鼎に学ぶ。元文2（1737）～文化9（1813）。76歳。

## 21. 伊勢物語（近世中期写）2冊

支子文庫本。大本、列帖装。表紙は紺地に金砂子をまき、遠山雲霞海辺文様（上巻）秋草花文様（下巻）、見返しには金銀箔を用いるなど、典型的な嫁入り本仕立て。表紙左肩の題箋に「いせ物語 上（下）」と墨書。上巻墨付49丁、下巻63丁。1面10行書、段末は往々にして散らし書きにする。上・下巻各24面の彩色の挿絵入り。下巻巻末に「伊勢物語新刊 世酷多矣」云々の嵯峨本第三種本（慶長14年刊）の奥書を有する。

本書は奥書を転写していることから窺えるように、嵯峨本を基として作成された近世の奈良絵本である。挿し絵の総数（但し落丁のため4段の絵を欠く）、挿絵箇所も嵯峨本に一致し、構図もほぼ等しいが、人物の配置、背景の図柄など、細部には相違が見られる。

## 22. 源氏物語（近世初期写本）29帖29冊

支子文庫本。横本。本文は青表紙本系統で、夕顔、末摘花、花宴、賢木、須磨、明石、絵合、松風、薄雲、乙女、玉鬘、初音、胡蝶、螢、野分、行幸、真木柱、梅枝、若菜下、柏木、夕霧、御法、匂宮、橋姫、椎本、宿木、総角、東屋、浮舟の29帖。うち17帖に「紹巴以本句切朱点」、「以紹巴本朱点句切一校了」、「以紹巴校合朱点句切之本一校了」、「以紹巴自筆本句切朱点一校了」などの識語あり。紹巴は室町時代末期の連歌師、紹巴抄の著者で、源氏物語の書写にもたずさわった。

---

### 23. 源氏物語（古活字版）54帖30冊

中世まで写本によって伝えられてきた和漢の典籍は、近世に入ると、続々と版本を見る。その出版活動の初期、慶長元和寛永年間、後の整版本ではなく、木活字を用いた、いわゆる古活字版の時代というべく、源氏物語にも数種の古活字版の存在が知られる。本書は古活字版研究の権威、川瀬一馬『古活字版之研究』未載の十一行古活字本。桐壺卷々頭は『弘文荘古活字版目録』所載の久邇宮家旧蔵本、胡蝶卷々頭は「寛永木活字本」として『定本源氏物語新解』中巻不載の金子元臣蔵古活字版に同じ。

### 24. 絵入源氏物語（承応版）54帖54冊

蒔絵師を家業とするかたわら、松永貞徳の源氏講釈を受け、後に木下長嘯子門下の歌人となった山本春正（天和二、1682年没）によって出版された、最初の版本絵入源氏物語。絵は全二二六図で、以後の絵入源氏版本のみならず、仮名草子の挿絵にも影響を与えた。刊記は「承應三甲午稔八月吉日／洛陽寺町通／八尾勘兵衛開板」。ノドの部分に丁付けを有す。（清水婦久子「版本『絵入源氏物語』の諸本」（上）参照。）

### 25. 絵入源氏物語写本 帚木（零本1冊）

大本。絵入版本を書写した本か。全七図の絵はすべて承応版と同じ場面を採り、うち六図までは、構図も同一であるが、第一図のみ、承応版挿絵と人物の数が異なる。頭注は寛文13年刊の首書源氏物語の首書（頭注）<sup>かしらがき</sup>を適宜採用したもの。版本には存在しなかった頭注付き絵入り本を意図して作られた可能性がある。後人の手になる朱の傍注と、おびただしい付箋が残るが、朱の傍注は、本居大平、春庭兩人の注であることが、巻頭に注記されており、鈴屋門下の手になると考えられる。蔵書印の「市岡暴行」なる人物は未詳。あるいは、鈴屋門の尾張藩士市岡猛彦にゆかりの本か。

### 26. 源氏物語（近世中期写本）54帖54冊

大本。本文は青表紙本系統であるが、承応版本、首書、湖月抄等の整版本の本文とは小異あり、本文、用字等、九州大学蔵の古活字版23. と酷似する箇所がまま見られる点で、注目すべき写本である。

### 27. 源氏物語歌絵（近世中期）1軸

支子文庫本。近世中期写。四季・賀・祝の各部ごとに『源氏物語』からそれにふさわしい場面を絵と和歌で描出したもの。各部の扱った巻と場面は次の通りである。

「春」－花宴（宮中南殿の桜の宴、源氏と朧月夜との邂逅）

「夏」－常夏（源氏、玉鬘に内大臣家の人々を評する）

「秋」－少女（秋好中宮から紫上へ「紅葉の消息」）

「冬」－朝顔（童女達の雪まろばし）

「賀」—若菜下（正月、六条院女楽）

「祝」—藤裏葉（内大臣邸の藤の宴）

ただし、賀部は、歌なし。（物語中でもこの場面では歌は詠まれていない）。

## 28. 河海抄（近世中期写）20巻12冊

大本。音無文庫本。四辻善成著。源氏物語についての和漢の出典考証のみならず、語句の考証・注釈にも意を用いた本格的注釈書。室町幕府二代将軍足利義詮の命により撰述。本書は螢、椎本、浮舟、夢浮橋各巻末に識語（池田亀鑑『源氏物語事典』下に翻字あり）。玉鬘、若菜上、東屋巻などに、ほぼ一丁分相当の親本に由来する錯簡が見出され、また、疑問詞「歟」を多く「也」に誤るなど、書写は必ずしも精確ではない。「鳳鳴図書」、「子孫永保雲煙家蔵書記」の蔵書印。

## 29. 花鳥余情 付休聞抄（承応3年（1654）写）30巻15冊

大本。支子文庫本。一条兼良著。四辻善成の『河海抄』を正し補うために著された注釈書。内容は語句のみならず文意の説明にまで筆が及び、注釈書として画期的な新しさをもった。初度本、再度本、献上本の三系統があるが、本書は初度本の系統で、上部余白の書き入れは、室町時代末に成立した里村昌休による『源氏物語』の注釈書『休聞抄』に通じる内容をもつ。奥書識語は第15末尾のみ見える。始めに「此抄河海<sup>廿</sup>巻 花<sup>卅</sup> 弄花<sup>七</sup>巻宗祇以来至宗牧説／天文十九孟秋上旬昌休誌之／此奥書 昌休自筆透写之」という内閣文庫本系の『休聞抄』奥書に類する記載、ついで、文明四年兼良奥書と明応七年五月二日儀同三司（四条隆量）の識語を改行せず続け、その後「以多本一校了 紹巴判／慶長十八<sup>亥</sup>仲冬口部書功／承応三年九月十一日 書写之 雅依（印）」。なお、京都大学附属図書館蔵『花鳥余情』も本書と同類の上部書き入れをもつ。太宰府神社文庫（天神文庫）旧蔵本。（源氏物語古注集成1『松永本花鳥余情』参照）

## 30. 弄花抄（近世中期写）7巻7冊

支子文庫本。列帖装。巻第二のみ金泥秋草模様を配した書写当時の表紙を残す。それ以外の巻の表紙は遊紙に後世題簽を付したの。『弄花抄』は、室町時代、弄花軒と称した連歌師牡丹花肖柏（1443～1527）の『源氏聞書』をもとに、彼の源氏学を継承した三条西実隆（1455～1537）が永正元年（1504）と永正七年（1510）に諸説を増補整理、以後も適宜補訂した注釈書。その結果、第一次本系統、第二次本系統、後人の書き入れを含む増補本系統という三つの本文系統が生じた。支子文庫本は増補本系統本文の特徴を備える。

## 31. 源氏物語覚性院抄 写本 25冊

大本袋綴。題簽に「覚性院抄帚木空蟬二」などと墨書（第一冊は剝落）。内題は「源氏物語聞書」。朱・紅・青・茶・の薄墨の書き入れ、付箋（剝落あり）、色紙片貼りつけ等多数有り。奥書は穂久邇文庫本と同じく、定家自筆大橋氏本『奥入』の奥書のみを持つ。覚性院（覚勝院とも）の源氏物語注釈書。覚性院は覚性院の僧を指すかとされるが、未詳。青表紙系統の本文を全文掲

げ、古注や三条西家（公条・実技）の説を記す。自注はごくわずかしか見られない。諸本は初期稿本系、通行本系、後期増補本系に分けられ（『源氏物語聞書覚勝院抄別冊』（汲古書院）参照）、本署は自筆稿本と目される穂久邇文庫本と同じく初期稿本系に属し、穂久邇文庫本から直接の転写本か。

### 32. 細流抄（近世中期写）10巻10冊

音無文庫本。袋綴。一部（巻五・六・七・八）別筆。

三条西実隆（1455～1537）が永正七年（1510）の第二次本『弄花抄』完成直後から執筆にとりかかり、同十年（1513）には成立していたと考えられる注釈書。それをういて実隆が行った源氏講釈で息子の公条による聞書が成立、その後、畠山義総の求めに応じて、この聞書を用い、二度に渡って適宜改訂した『細流抄』を送付した。息子の公条はこの聞書をもとに、『明星抄』を著している。このような成立過程を経たため、『細流抄』には複雑な本文系統が生じたが、音無文庫本は、実隆が永正十年までに作成させ源氏講釈に用いた本と同じ系統に属する。

### 33. 万水一露抄（近世中期写）54巻54冊

音無文庫本。袋綴。連歌師能登永閑（生没年未詳）が天正三年（1575）に完成した注釈書。先行注釈書の説を引用するほかに、師である連歌師宗硯や永閑自身の解釈を加えるなど、当時の連歌師の『源氏物語』享受の一面を窺わせる。本書は河野信一記念文化館蔵の『万水一露抄』五十四冊と本文のみならず、各葉の行数、各行の字詰振り仮名の有無に至るまで一致する。

### 34. 紹巴抄（無刊記版本）20巻20冊

音無文庫本。内題「源氏物語抄」。『休閒抄』を著した連歌師里村昌休の弟里村紹巴が、永録6年（1563）の三条西公条の『源氏物語』講釈の聞き書きをもとに作成、永録8年春成立。内容は、語句の解釈を中心とし、文意理解を主たる目的とした諸注集成。

### 35. 袖鏡（慶長期写）5巻5冊

袋綴。縦32.7×横25.2cmの特大本。中世には、源氏物語の梗概書として、源氏大鏡、源氏小鏡などが作られたが、本書は、源氏大鏡二類本に属する一本。源氏物語中の和歌をほとんどすべて挙げる他、本文を省略しながら梗概を述べ、引歌引詩、語釈などを記す。本書の特徴は、源氏物語の原文を相当量そのまま用いている点にあり、中世に流布した源氏物語本文の系統を知る上で貴重である。書写年代は、書風、装禎などから考えて慶長前後と推測される。源氏大鏡諸本の中でも、極めて古い時期の書写にかかるもの。各冊巻頭に「鑿水」の印。

（在九州国文資料影印叢書 細川文庫本『袖鏡』解説参照）

### 36. 源氏大鏡 写本3巻3冊

大本袋綴。江戸初中期写か。題簽なく、表紙左肩打ち付けに「源氏 天（地、人）」と朱書。内

~~~~~

題なし。墨書による若干の書き入れ、ミセケチあり。奥書識語の類はない。『源氏物語』の梗概・注釈書。著者未詳。南北朝時代成立か。梗概を巻順に述べ、随時、語釈・有職故実・和漢の故事・引歌・人物の系図関係が記される。本書は源氏大鏡三類本に属する。本文に若干の脱文が見られるが、三類本は伝本自体が少なく、善本はわずかであるため、本書の資料性は高い。(田坂憲二「九大本『源氏大鏡』について一付、『源氏大鏡』三類本本文と校異(序・桐壺)」(『文献探究』第15号昭和60年2月)参照)

### 37. 源氏小鏡 写本1冊

『源氏小鏡』は、南北朝時代の公卿花山院長親(明魏)作と伝える源氏物語の梗概書。伝来の過程で種々の異本が発生したが、大きく古本系(源氏物語の作中歌を110首前後含む)と改訂本(同じく、130首前後含む)に分けられる。本書、昏魚庵旧蔵本は列帖装、内容は古本系統であるが、うち若紫卷「いはけなき」、常夏卷「なでしこの」、藤袴卷「たづぬるに」の三首を欠く一方で、幻巻に「植をきし花のあるしもなき中にしらずがほにてきみるうぐひす」、早蕨巻に「君にとてあまたのとしをつみしかばつねを忘ぬはつわらびなり」の歌を有す。とくに「君にとて」歌は、130首本系統諸本になく、異本にのみ見える歌である点が注目される。(川原田祐子「九州大学蔵『源氏小鏡』の歌」『文献探究』第37号平成11年3月 参照)

### 38. 源氏物語系図 写本1帖

細川文庫本。大本折本。江戸初期写。題簽「源氏系図」、内題なし。『源氏物語』読解の便のため、作中人物を身分別家系ごとに系図にまとめ、簡単な略歴を付したもの。別に系図に入らない人を一括する。諸本は(1)三条西実隆以前の古系図、(2)実隆が肖柏・宗祇らの協力を得て長享二年に整理した系図の流れを汲むもの、(3)北村久備『すみれ草』(文化九年刊)以後のものに分かれる。本書は(2)に属し、その中でも最初期の長享二年奥書本にあたる。